

青陵

第 173 号

二〇二四年六月二日発行

発行者 奈良県立

橿原考古学研究所

奈良県橿原市畝傍町一番地

編集者 清水康二

目 次

資料紹介 柳本町渋谷東方出土の高杯	木下 亘	1
シリア文化財関係専門家研修 「遺物の修復と復元に関する研修」報告	中尾 真梨子	2
橿原考古学研究所における七五日間の研修記	イ・チヨロン	3
韓国国立扶余文化財研究所との 発掘交流実施協定締結	小栗 明彦	7
ひとの動き・計報・ アトリウム展示案内・附属博物館展示案内	編 集 者	7

資料紹介 柳本町渋谷東方出土の高杯

木 下 亘

ここで紹介する無蓋高杯は、二〇二一年九月に大阪梅田のとある古書店から奈良県云々と記載された貼紙のある土器があるとの連絡を受けた事に端を発する。店に伺うと木箱に今回紹介する高杯一点と陶質土器二点（四世紀後葉の西部慶南地域の伽耶土器有蓋高杯一点、五世紀後葉六世紀前半代の新羅土器有蓋高杯蓋一点）が共に納められており、その場で実見する機会を得た。この木箱については本来は他の器物用の箱で、現内容物とは全く関係がない。よっ

て、これ等土器収納用に転用した箱のため、当然の事ながら内容物に係る記載は一切ない。出土地に関する情報は、高杯に貼られた紙片のみで、共に納められていた二点の陶質土器にも何ら記載は見られない。二点の陶質土器は韓国内でも地域を異にし、更に時期差もある事から高杯とは元々関連がなく、たまたま所有者が同じ土器と言う括りで同一木箱に保管していたものであろう。

図示した高杯は、口径一一・八cm、器高九・六〜一〇・二cm、脚径七・

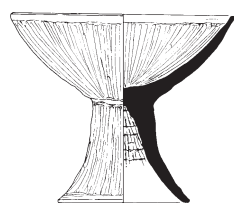


図1 高杯実測図
(S=1/4)



写真1 高杯

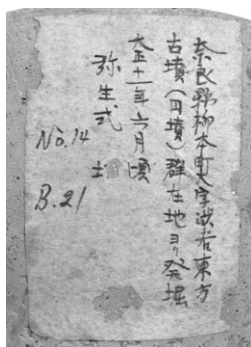


写真2 杯身外面の貼紙

〇cm、脚基部径三・二cmを計測する完形品である。杯部は脚基部から緩やかに湾曲し上方へ延び、口縁端部は丸く収めている。脚部は基部から直線的に延び裾部で外反し端部は丸く収める。杯部の内外面は放射状の細かいミガキ調整、口縁端部の内外はヨコナデによって仕上げる。脚部外面は縦方向の細かいミガキ調整、内面には絞り痕跡を残す。脚裾の端部内外はヨコナデによって仕上げる。杯身と脚部の接合は外面に胎土を足す事で接合面を補強している。内外面共に橙褐色を呈し焼成良好、胎土には微砂を含むが精良な粘土を使用する。一般的な高杯に比べ小型品で、时期的には弥生時代後期のものとの指摘を受けている(図1・写真1)。

さて、前述のように、この高杯の杯身外部面には五・七cm×二・七cmの紙片が貼り付けられており、

幸いそこには出土地をある程度想定し得る書き込みが記されていた(写真2)。

文面はペン書で記載されている。

奈良県柳本町大字渋谷東方
古墳(円墳)群在地ヨリ発掘
大正十一年六月頃
弥生式 図

No.14
B.21

このうち、No.14とB.21に関しては他にも伴出した遺物等があり、それらに対し順に番号を付す中でこの土器が14ないしは21番に当たるとも推測できるが、現時点で何を指すのか不明である。

現在、天理市渋谷町に該当する地域は、渋谷向山古墳を西端として東側の山間部を含む範囲となっている。当該地域で奈良県遺跡地図に円墳として掲載されている古墳は、渋谷向山古墳周辺に数基が知られる。貼紙

に見られる『古墳（円墳）群』とある記載がどの程度信憑性を持つのか判然としないが、仮に古墳群という記述から判断すれば、渋谷の範囲に入る古墳群は龍王山古墳群しかない。龍王山古墳群は、龍王山の南側を盆地に向かい流れ下る西門川沿いの谷筋斜面に形成された六〜七世紀にかけての古墳群で、その総数は六〇〇基を超える大規模群集墳である。このうち、渋谷側に含まれるのは谷の南側斜面部分が相当する。

貼紙にある『発掘』と言う記載にについてもどのような状況下の出土を指すのかは不明であるが、恐らくは掘り当てた程度の意味であろう。仮に開墾等に係っての出土であれば谷奥部にある古墳というよりは、比較的盆地に面した一画に立地する古墳

である可能性が高いものと思われる。よって、この土器は龍王山古墳群でも盆地に向かつて開ける渋谷西側入口部に近い地域の円墳から掘り出されたものと現時点では推測しておきたい。また、時期的な点からすれば埋葬施設等古墳に直接関わる遺物ではなく、墳丘盛土等に包含あるいは墳丘下の遺構内にあった土器と考えるのが自然であろう。当時の貼紙に見られる『弥生式 Ⅲ』との記載は、図らずも正鵠を得たものであったと言える。

正確な出土地点までは比定できないが、柳本町渋谷において大正時代に掘り出され現在に至るまで、ほぼ一世紀にわたって保管されてきた資料として紹介しておく。

シリア文化財関係専門家研修

「遺物の修復と復元に関する研修」報告

中尾 真梨子

一. はじめに

榎原考古学研究所では、国連開発計画（UNDP: United Nation Development Programme）から委託を受け、シリア文化遺産継承のた

めの人材育成研修を平成二九年より実施している。令和五年度は、合計三回のシリア文化財関係専門家研修が実施された。そのうちの一回を、遺物の修復と復元に関する研修と題

し、令和五年一月三〇日〜二月一八日の間実施した。

研修に参加したのは、シリア古物博物館総局 Elias Abd Alnour さんと Fares Alaraj さんの二名である。

研修は榎原考古学研究所において行われ、奥山誠義所員、河崎衣美所員、小倉頌子所員、筆者の四名が講師を担当した。コーディネーターは西藤清秀所員である。

研修は、保存科学の専門知識を基に、発掘現場で脆弱遺物が発見された際の緊急的な対応方法や修復技術について実施した。

二. 研修の内容

研修は、土層断面の転写方法、硬質発泡ウレタンを用いた脆弱遺物の取り上げ方法、石造文化財の保存と樹脂強化方法などについて、講義と実習を交互に行いながら研修を進めた。また、研修の理解度が深まるよう、より実践的に可能な限り発掘調査現場で実習を行った。今回の研修は、発掘現場担当所員の皆さんの全面的な協力により、発掘現場での実習を行えたことが幸いであった。シリアと日本では気候や土壌の状態に違いはあるが、研修で習得した方法や素材等の考え方をわかりやすく実

践してもらうことができた。

EliasさんとFaresさんは、共に明るい性格に加え意欲的で、研修中は質疑応答が止まらなかった。休憩中も、お互いの国の文化や食について楽しく語り合った。アラビア語と日本語を教えあったが、筆者がかろうじて覚えられたのが「Yalla（行くぞ!）」のみであった。アラビア語習得までの道のりは長い。

三. 研修生からのコメント

今回の研修報告にあたって、Eliasさん、Faresさんからコメントをいただいた。

Elias Adb Alnour 「この研修で、脆弱な文化財への修復方法や対処方法について、これまでの方法とは大



飛鳥宮跡での実習の様子
(右/ Eliasさん、左/Faresさん)

きな違いがあることを知りました。研修内容は豊富で、長期間にわたり行われ、講師の皆さんには大変な労力をかけました。

この研修を生かし、また得た知識と経験を継続させるためにも、シリア古物博物館総局の同僚に学んだ内容を伝える必要があります。私は、この研修で得た新しい知識や材料、使用方法を伝えるために、シリアで同様の研修を実施したいと考えています。」

Fares Alaraj「いの有益で貴重な研修を提供して頂いた、榎原考古学研究所の皆様に感謝します。脆弱な

榎原考古学研究所における七五日間の研修記

一．はじめに

二〇二四年一月一日から二〇二四年三月二十九日までの約三ヶ月間、大韓民国国立文化財研究院と榎原考古学研究所間の文化遺産交流協力に関する協定に基づき、埋蔵文化財情報管理統合プラットフォーム構築のための事例調査および活用方策の研究という主題で派遣研修を実施した。二〇一三年に文化財庁に入庁して

遺物の取り扱い方、安全な運搬方法、修復の仕方など、研修で新しく得た知識は、シリア古物博物館総局での私の仕事にプラスとなるでしょう。理論的な講義、写真、解説ビデオ、さらには遺跡での実践演習を通じて、新しい貴重な情報を提供してくださった日本の専門家や友人達に感謝しています。」

四．おわりに

二〇日間という、長くもあり短くもある研修期間であった。本研修がシリアの文化遺産継承に少しでも寄与できれば幸いである。

イ・チヨン

以来ずっと、漠然とではあるものの榎原考古学研究所での研修に心から行きたいと考えていた。個人的に日本という国が大好きだったからである。育てるべき娘が二人もいるが、非常に良い機会と考え、「日本の埋蔵文化財の情報管理に関するデジタル環境の調査および事例の検討」「デジタル技術を適用した国家遺産の保存管理と活用に関する政策およ

び制度の検討」、「日本の遺跡および遺物の調査等」を目的として派遣研修に申請した。

国立文化財研究院と榎原考古学研究所は二〇〇三年から学術交流を強化するため、研究者の人的交流を通じた友好関係を推進してきた。これを通じて両国の最新の研究情報などを相互交換し、研究水準の向上と両国の文化遺産の比較研究を通じた文化遺産学術交流における相乗効果の創出という成果を上げてきた。

私は、加耶における四世紀代の古式陶質土器が専門だが、考古研究室での業務は韓国考古学のデジタル辞典の構築といった「考古学の学術情報デジタル大転換」を担当している。そのため、遺跡の発掘調査や考古学の学術的分野を主な目的にこれまで派遣された研修者たちとは異なり、聞き慣れないデジタル分野での派遣研修の申請となった。そのため、デジタル分野を専門とする研修者を受け入れる榎原考古学研究所側はどう考えるのか、どう受け入れてくれるのか、そしてどのような関連テーマで調査するなど、心配と懸念を多く抱いたまま私の七四泊七五日間の日本での旅程が始まった。

二．榎原考古学研究所での研修

日本に着いた初日、研修を担当する企画課の小栗明彦さんと東影悠さんが関西空港に迎えに来てくださった。一人で飛行機に乗ったのは生まれて初めてだったので、戸惑いの連続に重い荷物が加わり、汗まみれになった惨めな姿で初めての挨拶を交わした記憶がある。榎原考古学研究所へ向かう自動車の中、時折続く会話のぎこちなさと緊張感は、いつの間にか私のために遠方まで迎えに来てくれた感謝と、これからの日本での生活に対する期待感に変わっていた。

三ヶ月間過ごす宿舍と電車の最寄り駅、周辺の施設などを確認した後、研究所に到着し、研究所の施設、部署、業務などを紹介してもらい、職員の方々と名刺交換しながら挨拶したが顔と名前がすぐには一致せず慌てた記憶がある。しかし、宿にオンドルがなく寒いだろうと心配して電気マットを貸してくださった岡田憲一さんをはじめ、私がパン好きだと聞いておいしいパン屋さんを紹介してくださった中村健太郎さん、私の名前を刻印した世界に一つしかない特別なペンをプレゼントしてくださった西岡安子さん、いつも明るい

性格で楽しく元気をくれた中尾真梨子さん、いつも親切な小倉頌子さん、そのほかにも毎日親切に笑って挨拶してくださる多くの職員の方々から温かさをいただいた。全員のお名前は列挙できないが、以下に記す研修内容と共に感謝を込めてお世話になった方々をできる限り記載してみようと思う。

三、文化財関連デジタル業務の環境調査

私の研修目的である日本の埋蔵文化財の情報管理に関するデジタル環境の調査および事例の検討のために、まず榎原考古学研究所のデジタル関連業務について調査を行った。杉山拓己さんが、デジタルアーカイブ関連業務の紹介と人員配置、業務手順、設備などを紹介してくださった。近年は、発掘調査に関わる三次元データが増加しており、これを適正に管理するために現在使用中のクラウドサーバーの容量を増やす必要があること、写真の管理方法の効率低下が想定されることが今後の課題であると同った。

奈良文化財研究所には二回訪問し、デジタル関連業務について調査を行った。奈良文化財研究所は、日

本全国の文化財に関する情報を集約したデータベースを構築し、運用している。発掘調査や研究に関する情報など様々なデータを安全に管理・保管して公開できるように支援しており、公開データは日本国内の文化財担当者のみならず広く国民や海外の研究者にも利用しやすい環境となっていた。ここでは、日本の文化財のデータベース構築の手法について調査を行い、韓国と日本の考古学的用語のデータベース連携と抄録の相互検索システムの構築などについて議論することができた。

次に、日本の文化遺産の三次元計測およびデータの確認と活用方法についての調査を実施した。文化遺産を長期間にわたって保存するために、これを公開して広く普及させ、多くの人々が楽しんで活用できるようにする必要がある、その方法の一つが三次元データである。考古学界においても、文化遺産の保存と研究に三次元データを活用する方法が重要なテーマの一つとなっている。文化財の活用促進のための科学的調査の一環として、現在進行中の遺構と建造物の三次元データの活用に関連する調査として、河崎衣美さんの提案により静岡県で調査を行うことにな

った。

この調査では、日本の文化遺産に関する三次元計測とバーチャルリアリティ（VR）を活用した研究事例を知ることができた。三次元計測のポインタクラウドデータを活用した日本の文化遺産アーカイブをはじめ、デジタルデータを活用しながら多くの人々に新しい経験の場と価値を提供するために、VRなど最新の手法を積極的に取り入れていた。文化財の活用に関連するデジタル業務について多くを学ぶことができた。また、初めて乗った新幹線に興奮した自分の姿を今も鮮明に覚えている。一緒に調査に行くことを提案してくださった河崎さんに感謝を伝えたい。

その他、デジタル技術を用いた国家遺産の保存管理・活用に関する政策や制度を調査した。日本は第四次産業革命時代および知能情報社会という時代の流れと共に、新型コロナウイルスの影響によりデジタル基盤の必要性を痛感し、文化財行政など文化遺産全般にわたってデジタル化を推進している。また、デジタル政策を強く推進するために、標準化とデータの共有・活用を重視している。国は、国民に文化遺産を浸透させるため、デジタル技術を適用する



写真1 日本の文化遺産に関する三次元計測とバーチャルリアリティ（VR）

ことに加え、行政等の関連制度の改正など、社会的受容の向上に向けた様々な課題を検討し、デジタル技術の活用に関する取組を全国各地で活発に展開していた。デジタル技術の導入に伴う制度や指針など基本的な方向性を示し、デジタル化に対応するための予算確保や制度設計を着実に進めつつある。しかし、韓国と同様に、文化遺産業務のデジタル大転換において、専門的人材と予算の不足という大きな障害によって、現実にはあまり進展がみられないことを感じた。

四、博物館見学

「その国の歴史と文化を知りたいなら、その国の博物館を訪れればい



写真2 行燈山古墳 (左から：筆者・黒澤氏・崔氏)



写真3 岩橋千塚古墳群 (左から：崔氏・筆者)

い」と言うように、その地域の歴史と文化を知るためには、その地域の博物館を訪ればよい。派遣研修の主目的はデジタル関連だったが、日本の文化全般を知ることこそが最も基本的で最も重要な点だと考えた。奈良国立博物館、京都国立博物館、九州国立博物館をはじめ、橿原考古学研究所附属博物館、大阪歴史博物館、近つ飛鳥博物館、弥生文化博物館、神戸市立博物館、兵庫県立考古博物館、福岡市立博物館、九州歴史資料館、大野城心ふるさと館、西都原考古博物館、和歌山市立博物館、柏原市歴史資料館、桜井市立埋蔵文化財センター、天理参考館、なら歴史芸術文化村など様々な地域の多く

の博物館を見学しながら日本の先史時代から近代に至るまでの歴史全般を勉強することができた。特に宇野隆志さんを行った天理参考館は日本だけでなく世界中の資料が展示されていたこと、その日は雨がたくさん降ったことが頭の中に残像として今も残っている。

五、発掘調査現場の見学

様々な発掘調査現場を訪問したが、橿原考古学研究所の発掘調査の現地検討会が一番記憶に残っている。県内の発掘調査現場を月一回訪問し、皆で集まって検討するということはとても良い趣旨だと感じた。特に、コウヤマキ製の割竹形木棺、

これまで出土したことの無い甕龍文盾形銅鏡、長さ約二三七cmと日本最大の蛇行剣が出土し、ニュースで大きな話題となった富雄丸山古墳の発掘調査現場を直接目にするのができたのは、人生で二度とない良い機会となった。それだけでなく、奥山誠義さんが蛇行剣をクリーニングする際に実物を直接見ることができたことは光栄だった。

検討会には、東影さん、北井利幸さん、崔瑛恩さんと同じ車で行ったが、一緒に食べた昼食の塩ラーメンは本当に美味しかった。辛い食べ物に苦手と言っていた北井さんの姿を今でも思い出す。

また、奈良文化財研究所の平城京の発掘調査現場と一緒に見学に行った大西貴夫さん、米田敏幸さんと食べたうどんもとてもおいしかった。素晴らしい遺跡を見学し、おいしい食事をともにできたことに感謝している。

六、遺跡見学

前にも述べたように私の専門は加耶土器だったが、日本で最も勉強した分野はまさに古墳、特に前方後円墳であった。有名な前方後円墳はほぼすべて見学することができた。こ

れは日本で初めて知り合ったソウル大学の崔瑛恩さんのおかげだ。初めて会ったがなぜか実の妹のように親近感を感じた崔さんのおかげで日本での生活が寂しくならずにすんだ。彼女の専門がまさに前方後円墳だった。崔さんがいた一カ月間、ありがたいことに多くの研究者たちの助力でともに古墳を見学し勉強することができた。特に奈良県内の前方後円墳の見学に一緒に行ったたくましい性格の黒澤ひかりさんにはとても感謝している。

また、小栗さんと二泊三日で行った九州方面への調査は大変な思い出となった。新幹線と高速バスで移動し、飛行機に乗って奈良に戻るという強行軍だった。宮崎県の西都原古墳群、果たして私の人生においてこの素晴らしい古墳を一人では見学に行けたのだろうか考える。私のため、忙しい日程にも関わらず疲れを乗り越えまた花粉症で苦しみなながら、飛行機で百舌鳥・古市古墳群を見下ろせるように座席にまで繊細に配慮してくださった小栗さんには大変申し訳ない気持ちとともに、大きな感謝を感じている。

この他にも、日本に到着してまもなく一人で行った明日香村周辺の遺

跡見学は今も忘れられない。藤原宮跡、石舞台古墳、キトラ古墳などをひたすら歩いて見学したところ、一日で三万歩以上という自身の最高記録を更新していた。

七・研究会・学会・講演会への参加
研修期間中、多くの学会や研究会、講演会に参加することができた。韓国とは違い、ほとんどの学会と講演会が週末に開催されることに驚いた。週末にもかかわらず、学会の会場を埋め尽くす市民の方々の熱気と文化遺産に対する高い関心に感動した。

また、一九五四年から続く檀原考古学研究所の研究会や談話会にも参加することができた。談話会は毎月一回、金曜日の夜に研究所職員の研究発表が行われており、多忙な業務の終了後にも研究に精進する様子は素晴らしいと感じた。

その他、現在は奈良県庁文化財課に異動し懸命に働いている絹島歩さんの『龍王山古墳群と「古墳の理論」』特別展の関連講演（歴史に想う檀原市博物館）、『古墳時代の石枕と葬送儀礼』シンポジウムの北山峰生さんの発表（近つ飛鳥博物館）はとても興味深く勉強になった。また、古代

学研究会への参加を勧めてくれた米田さんにもお礼を言いたい。

八・遺物の調査

私の専門が加耶土器であることを知って関連遺物の調査を柳本照男さん、木下亘さんなど多くの方々が助けてくださった。おかげで、岩越陽平さんや大阪大学大学院の我妻佑哉さん、近藤葵さんとともに須恵器を観察し、勉強することができた。とてもありがたい時間だった。

九・韓国語の勉強会

毎週月曜日の午後六時から一時間ほど、内藤元太さん、蓮井寛子さんと一緒に韓国語の勉強会を行った。初めて檀原考古学研究所に来た時、韓国語が上手な方が多くて驚いたが、勤務時間終了後も自らの学問のために熱心に学ぼうとする姿に驚くとともに、自分のことを反省した。独学で韓国語を学んだという内藤さんの実力、学んだばかりなのに実力がすぐに高くなる蓮井さんの姿に感嘆した。私の日本語の実力が不十分なために十分に二人の役に立てなくて申し訳なく惜しい気持ちでいっぱいだった。

勉強会後は外がとても真っ暗にな

っており、帰宅する道中が恐ろしくもあったが、また胸がいっぱいにもなった。彼らのおかげで私も日本語を学ぶことができ、とてもありがたい時間だった。特にこのような縁のおかげで内藤さんの結婚式にも参加することができたが、韓国と全く違う日本の結婚文化を自分の目で直接見ることはとても記憶に残っている。

一〇・新聞記事への掲載

二月のある日、突然新聞記者からインタビューを受けることになった。記者の方が檀原考古学研究所での派遣研修の期間や目的、専門分野などに関して取材をされた。ぎこちないながらも何か飾り気のある表情でポーズを取り写真を撮られた自身の姿が今でも鮮明に記憶に残っている。

「韓国の若手研究者が奈良檀原考古学研究所で研修」、「韓日考古学の架け橋―若手研究者、交換派遣再開」というタイトルで読売新聞と産経新聞に掲載された。どうやって知ったのか日本をはじめ韓国の多くの方々からも記事を読んだと連絡が来るとともに、特に母の自慢となり一家の栄光になってしまった。ただ、



写真4 豊中市教育委員会での須恵器の調査

Kinki Kidsと関連した記事の内容は今でも恥ずかしい。

一一・おわりに

こうして私の七五日間の檀原考古学研究所での研修は終わった。奈良をはじめ、大阪、京都、兵庫、和歌山、静岡、福岡、宮崎など様々な地域の博物館や遺跡、発掘調査現場を訪れ、学会への参加などにとっても忙しい日々であった。多くの方々の助けなしには、研修関連の調査をはじめ、日本各地の素晴らしい遺跡と博物館、学会参加は不可能だった。私の人生において二度とない経験をさせていただけただけにあらためて感謝

する。本当に素晴らしい方々と日々を過ごすことができ、感謝の毎日だった。特に、しばらくの期間、育児から解放されたことは幸せな日々だったと感じる。今でも檀原神宮の境内を歩いた通勤途中の空気が、匂い、雰囲気すべてが鮮明だ。

私の担当業務のみならず個人的な専門とそれに関連した多くの勉強と経験を通じ、とても良い研修成果を上げることができた。しかし、最も大きな成果は、日本の皆さんとの良い縁を作ることができたということだ。全ての方々のお名前を記すことはできなかったが、青柳正規所長、

韓国国立扶余文化財研究所との

発掘交流実施協定締結

小栗明彦

檀原考古学研究所と韓国国立文化財研究所は国際連携協定「文化遺産交流協力に関する包括協定」を締結している。それに基づく実施協定「研究員派遣を通じた交流協力に関する細目協定」も定めて（青陵一六九号参照）、今年一月より同院考古研究室との間で毎年一人七五日間の研究員相互派遣研修を行っている（本号イ・

川上洋一副所長をはじめ米川仁一企画課長、高木清生さん、岡見知紀さん、青柳泰介さん、平井洸史さんなどすべての方々に感謝している。本当に感謝の気持ちを表現するために日本で一番多く話した言葉が「韓国に來たら一〇倍以上返す」である。この縁が切れず、一生続く固い絆となるように、韓国で忘れずに覚えていることにする。

今後も交換研修が継続的に行われ、両機関の学術交流がますます活発となるとともに、韓国と日本の人脈作りにも大きく役に立つことを願っている。

主な内容は今後五年間、檀考研と扶余文化財研究所が行う発掘調査に研究員を毎年六〇日以内で相互派遣するというものである。

端緒は二〇二三年二月二十四日、私が三日後に控えた檀考研と文化財研究院の包括協定締結式の準備に走り回っていた車内で、チョン・ヨンホ同院考古研究室学芸研究官（当時）から、イム扶余文化財研究所長が檀考研との発掘調査の交流を望んでいると相談されたことだった。二七日の包括協定締結式後に青柳正規所長以下檀考研代表団が扶余に案内され、正式に打診を受けた。四月一八日にはイム扶余文化財研究所長らが檀考研に來訪し、協議を行って交流事業を推進する方針を固め、一月に今回の協定締結と相成った。

檀考研は百濟前半期の王宮、王陵の発掘調査を進める韓国ソウル特別市漢城百濟博物館と既に連携協定を結んでいる（青陵一七二号参照）。扶余文化財研究所は百濟後半期の王宮、王陵の調査機関であり、この協定締結によって我々は百濟全時期の調査研究に機関として接近できる機会を得たのである。

ひとの動き

（退職 令和六年三月三十一日付）

鶴見泰寿 企画学芸部資料課資料係長

↓名古屋大学大学院教授

新田育久 総務課総務係主査

（転出 令和六年三月三十一日付）

大西貴夫 調査課長・地域創造部世界遺産室室長補佐兼務

↓地域創造部文化財課課長

補佐・地域創造部世界遺産室室長補佐・観光局奈良公園室兼務

（転出・所内異動

令和六年三月三十一日付）

絹畠 歩 調査課調査第二係主任研究員

↓同 調査第一係主任研究員・文化財課兼務

（転入 令和六年四月一日付）

小倉美由紀 なら食と農の魅力創造国際大学校主任主査

↓総務課総務係主任主査

吉浦直美 中和保健所主任主査

↓総務課総務係主任主査

（転入・昇任 令和六年四月一日付）

鈴木裕明 文化財保存課課長補佐・世界遺産室室長補佐兼務

↓調査部長・調査課長事務取扱・世界遺産室参事兼務

(転入・昇任・所内異動)

令和六年四月一日付)

中野 咲 調査課調査第一係主任研究員・文化財保存課兼務

↓同 調査第二係指導研究員

(昇任 令和六年四月一日付)

小栗明彦 企画課企画係長

↓企画課長

高木清生 企画課企画係指導研究員

↓同 企画係長

北山峰生 調査課調査第一係指導研究員

↓同 調査第一係長

岡田雅彦 調査課調査第一係主任研究員

↓同 指導研究員

杉山拓己 資料課資料係主任研究員

↓同 指導研究員

小倉頌子 資料課資料係主任技師

↓同 主任研究員

中尾真梨子 調査課調査第二係主任技師

↓同 主任研究員

小泉翔太 調査課調査第二係主任技師

↓同 主任研究員

内藤元太 調査課調査第二係主任技師

↓同 主任研究員

岩崎郁実 調査課調査第一係技師

↓同 主任技師

蓮井寛子 調査課調査第一係技師

↓同 主任技師

(所内異動 令和六年四月一日付)

川上洋一 副所長兼附属博物館長・調査部長事務取扱

↓副所長兼附属博物館長

東田 浩 総務課総務係主査

↓同 主事

米川仁一 企画課長

↓調査課副主任

米川裕治 調査課調査第一係長

↓資料課資料係長

清水康二 調査課調査第二係指導研究員

↓同 主任技師

東影 悠 企画課企画係指導研究員

↓調査課調査第一係指導研究員

齊藤 希 調査課調査第一係主任研究員

↓同 主任技師

岡林孝作 学芸アドバイザー

↓学術アドバイザー

(新規採用 令和六年四月一日付)

谷川 遼 調査課調査第一係技師

横山 舞 調査課調査第一係技師

松尾樹志郎 調査課調査第二係技師

計 報

令和六年三月一二日に研究顧問の

角山幸洋先生が逝去されました。永年の研究所へのご指導とご尽力に感謝いたします。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムでパネルを中心に展示しています。今回は科研費による研究成果展「同一文様鏡製作のための同型技法の再現実験」を開催します。詳細はホームページなどで公開します。観覧時間は月曜日から金曜日の八時三〇分から一七時一五分です。

附属博物館展示案内

重要文化財指定記念特別陳列

「ホケノ山古墳

ーヤマト王権の成立へー」

会期：令和六年六月二九日(土)

七月一五日(月・祝)

ホケノ山古墳は、いわゆる邪馬台国の時代やヤマト王権の始まりをさぐる貴重な資料として、これまで大いに考古ファンや考古学者たちの注目を集めてきました。そして本年、その歴史的価値から、ホケノ山古墳

出土品が国の重要文化財に指定されました。このことを記念する本展覧会は、ヤマト王権の中心地であった纏向遺跡より出土した品々とともに、普段展示されていない出土品も含め、ホケノ山古墳出土遺物を一挙大公開します。

【講演会】七月七日(日) 一三時

榎原考古学研究所 講堂

【列品解説会】

七月一三日(土) 一〇時三〇分

「大和を掘る39」

会期：令和六年七月二七日(土)

九月一六日(月・祝)

二〇二三年度発掘調査速報展「大和を掘る39」では、奈良県内で昨年度に発掘調査された遺跡を中心に、出土遺物・調査写真パネルを展示いたします。奈良県における最新の発掘調査の成果を多くの方々にご覧いただき、豊富な文化財を確認するとともに、奈良県の魅力を知っていただきたいと思います。

【土曜講座】(全四回)

七月二七日(土)、八月一〇日(土)、

八月三一日(土)、九月一四日(土)

各回ともに一三時

榎原考古学研究所 講堂